
研究報告

秀明大学看護学部紀要
P.27-35 (2023)

現場とつながるオンライン高齢者施設実習の成果と現状 ～学生の学修成果と課題～

Outcomes and Current Status of Online Practical Training at Long-term Care Facilities
for Elderly ~Learning Outcomes and Issues of Nursing Students ~

江口 恭子¹⁾
Kyoko Eguchi

石津仁奈子¹⁾
Ninako Ishizu

石川りみ子²⁾
Rimiko Ishikawa

要 旨

COVID-19の影響により、オンラインとなった高齢者施設実習をリアルタイムでのコンテンツ提供とビデオ通話を用いた双方向コミュニケーションを中心とした方法で、施設入所中の高齢者を受け持ち実施した。本研究はその学修成果と課題を明らかにするため、学生3名に個別インタビューを行い分析した。

学修成果では動画視聴や高齢者像作成を踏まえた【討議を重ねることによる学びの深化】を経て【看護・介護の専門性の具体的な学び】や【その人らしさを尊重したケアの重要性への学び】【認知症高齢者のとらえ方の肯定的変化】【動画視聴による様々な援助場面の理解と満足感】等につながった。また、【学びの過程を共有することによる実習の達成感】や【動画視聴と討議を重ねることによる学びの深化と満足感】は【オンライン実習による主体的な学習態度の涵養】をもたらしていた。背景には【教員との円滑なコミュニケーションによる学びの深化】や【実習指導者との緊張的関係の緩和】が影響していると考えられた。オンライン実習の課題として【看護技術の実践力への不安】【資料作成におけるグループワークのしづらさ】や長時間のパソコン使用による【オンライン実習での臨地実習と異なる疲労感】があった。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、高齢者施設、老年看護学、オンライン実習

Key Words : Covid-19, Long-term care facilities for elderly, Gerontological Nursing, Online training

I. はじめに

Coronavirus disease 2019 (以下、COVID-19 とする) まん延により、多くの看護師養成施設では2020年度以降の実習を学内あるいは遠隔で行うことを余儀なくされた。本学でも看護学実習を含む2020年度前期授業を、全面的にネットワークを通じて行う遠隔授業とすることが決定された。授業時間内に配信すること、双方向であること、学生の通信状況に負担をかけないために音声や動画の使用は必要最低限にするという原則のもと、遠隔による看護学実習を約1か月で準備

することになった。また、本学看護学部は2017年に創設されたため、4年生前期の実習が初めてであったことに加えて、実習施設である高齢者施設ではこれまで看護学生の実習を受け入れた経験がほとんどなかった。これらの厳しい条件のもと、臨場感ある学びとするためにビデオ会議システムを用いてリアルタイムにコンテンツを配信し、討議する方法を選択した。提供するコンテンツは実習施設の協力を得て作成したオリジナル動画、実習施設に入所している受け持ち高齢者情報、ビデオ通話による受け持ち高齢者とのコミュニケーション、実習指導者のレクチャーと討議等とした。これらをもとに実習を行い、全ての学生が目標達成に至った。今回、その学修成果と課題を学生へのインタビューから明らかにしたので報告する。

1) 秀明大学看護学部

1) *Faculty of Nursing, Shumei University*

2) 清泉女学院大学看護学部

2) *Seisen Jogakuin College, Faculty of Nursing*

II. 研究目的

オンラインによる高齢者施設実習（以下、オンライン実習）での学修成果と課題を明らかにする。

III. 老年看護学実習Ⅱ（高齢者施設実習）の概要

1. 実習目的・目標

老年看護学実習Ⅱは、障害を抱えながら地域で生活する高齢者とその家族の特性を理解し、地域の保健・医療・福祉サービス機関と連携しながら、高齢者が地域で生活し続けるための継続看護を実践するための能力と態度を養うことを目的とし、4年生前期に2週間実施する2単位の必修科目である。実習施設は介護老人保健施設または介護老人福祉施設で、2020年度に初めて実施する予定であった。しかし、COVID-19の影響により、当該科目の臨地実習の経験が全くないままオンラインで実施する運びとなった。

実習目標は、① 介護老人保健施設等で生活する療養者を全人的に理解し、その人らしさを尊重した施設における看護の機能と役割を考えることができる ② 認知症など生活機能障害のある高齢者とその家族を全人的に理解し、尊厳ある態度で接することができる ③ 施設および地域における保健・医療・福祉の連携および社会資源の活用を理解し、高齢者が地域で生活し続けるための支援について考えることができる の3つであり、それぞれの実習目標に対して具体的到達目標を設定した。具体的到達目標には実践力を求める「対象の気持ちを尊重し、快を与える生活援助を計画し実施・評価できる」「生活の中でその人らしさが生かされるよう対象の強みを活かした支援ができる」等が含まれている。

2. 学生の状況

受講した学生34名は、3年次後期の各論実習をすべて臨地で経験した。老年看護学分野では老年看護学実習Ⅰにおいて病院で高齢患者を受け持つ2週間2単位の实習を行った。

3. 高齢者施設実習をオンラインで行うにあたっての変更点

分野内の教員で討議し、実習目的・目標については変更しなくても達成可能であることを確認した。到達目標については、オンラインの特性上、実践的な内容は達成することが難しいことから、「計画・実施・評価」に関するものは「計画できる」「考えることがで

きる」とし、思考を重視するものに変更した。

4. オンライン実習に用いたツール

1) Zoom CloudMeetings（以下、Zoom）

Zoom社が提供するビデオ会議システム¹⁾を初日オリエンテーション、動画視聴と討議、カンファレンス・報告会、実習指導者によるレクチャー、受け持ち高齢者とのコミュニケーションに使用した。

2) Google Classroom（以下、GCR）

Google社が提供する教育機関向けWebサービス²⁾。オンライン上でメッセージの送受信、資料配布、課題の配信、提出、採点、返却を行うことができる。また、ビデオ会議ツール（Google Meet；以下、Meet）や、ドキュメント作成ソフト（Google ドキュメント；以下、ドキュメント）、プレゼンテーションソフト（Google スライド；以下、スライド）が連動しており、GCRのメンバーとなっている教員・学生間でファイルの共有や、共同編集が可能である。朝の出席確認、資料配布、諸連絡、記録物・レポートの提出、最終報告会の資料作成においてGCR及びドキュメント、スライドを使用した。また、一部のカンファレンスではZoomに代えてMeetを使用した。

5. 事前準備

2020年4月、実習が全面的にオンラインになることが決定された際、直ちに実習施設に協力を依頼した。感染予防の観点から施設に立ち入ることができないため、Zoomを用いて実習指導者と打ち合わせを重ねて実習内容を検討し、受け持ち高齢者情報の提供、施設構造やケア場面・デイサービスの動画撮影、実習指導者によるレクチャーとカンファレンスへの参加について協力を得た。受け持ち高齢者は現在、実習施設に入所中で認知症の診断を受けた65歳以上の高齢者を実習指導者が選定した。高齢者および家族には実習指導者が実習のために情報を提供することと学生とビデオ通話を行うことを説明し同意を得た。

学生に対しては、通信状況を確認するとともに、可能な限りパーソナルコンピューターを準備し、一日数時間のビデオ通話が可能な通信環境を整えるよう伝えた。

6. オンライン実習の進め方(表1 実習スケジュール)

実習開始までにGCRから実習要項、実習記録用紙等の資料と事前学習課題を配信した。学生は3～4名

のグループで1名の認知症高齢者を受け持ち看護過程を展開した。実習期間を通し、受け持ち高齢者のアセスメントと同時進行でケア場面等の動画視聴と討議を行った。加えて、一週目には認知症高齢者とのコミュニケーション場面の動画を基にしてプロセスレコードを作成した。二週目には受け持ち高齢者の生活史を踏まえた高齢者像を各々がまとめ、発表して討議し深めていった。さらに認知症高齢者を深く理解するために、Zoomでコミュニケーションを行った。コミュニケーションはグループ全員と受け持ち高齢者が15分程度会話をした。コミュニケーション前日には、進め方も含めて学生が主体的に考え、互いに受け持ち高齢者を演じて練習をした。実習指導者が参加するカンファレンスでは、高齢者像をまとめていく過程で学生が必要

と思った情報に加えて、動画を視聴して疑問に思ったことや確認したいことを質問できる時間を設けた。

学生は、毎日GCRを介して実習開始前に日々の行動計画を、実習終了時はその日の実施と考察、学びを提出し、教員がコメントを入れて返却した。実習最終日は実習指導者を交えて合同報告会を行った。報告会後には個別面接を行い、目標達成度を確認した。Zoomを使用しない時間は個人ワーク(Personal Works;以下、PWとする)とし、学生各々が理解を深めるために主体的学修に取り組んだ。受け持ち高齢者のプライバシー保護の観点から受け持ち高齢者の氏名はメールやGCR、実習記録等に一切記載せず口頭で伝えるのみとし、学生には個人情報保護に関する誓約書の提出を義務づけた。

表1 実習スケジュール

週	曜日	午前	午後
一週目	月	・実習オリエンテーション (Zoom) ・施設オリエンテーション (動画視聴)	・「受け持ち高齢者の理解・アセスメント」 (PW) ・グループカンファレンス (Zoom)
	火	・「アクティビティ・ケア、介護職による日常生活のケア」 (動画視聴と討議)	・記録の整理 (PW) ・グループカンファレンス (Zoom)
	水	・認知症高齢者とのコミュニケーション場面 (動画視聴) ・動画に基づいたプロセスレコード作成 (PW)	・プロセスレコードの共有と討議 (Zoom) ・グループカンファレンス
	木	・看護職によるケア (動画視聴と討議)	・プロセスレコードの発表と討議 (指導者参加, Zoom)
	金	・「施設における看護師の機能と役割」 (実習施設看護職によるレクチャー動画視聴と討議)	・実習施設看護職との質疑応答 (Zoom) ・目標達成度の中間評価提出
二週目	月	・「デイサービスの実際」 (動画視聴と討議)	・「受け持ち高齢者像と考察 (以下、高齢者像)」作成 (PW) ・高齢者とのコミュニケーション練習 (Zoom)
	火	・受け持ち高齢者とのコミュニケーション (Zoom) ・高齢者像の追加修正 (PW)	・高齢者像の共有と討議 ・「家族の介護問題と社会資源の活用」 (実習指導者によるレクチャーと討議)
	水	・アセスメント、看護問題・ニーズの抽出 (PW) ・ケア場面の動画視聴と討議	・グループカンファレンス ・合同報告会の準備;スライド、ドキュメントの共同編集による資料作成 (グループカンファレンス)
	木		・目標達成度の最終評価提出
	金	・合同報告会 (Zoom, 実習指導者参加)	・記録のまとめ (PW) ・個人面接、最終カンファレンス

- ・ 学生は毎日、朝は行動計画を、実習終了後には実施・考察と学びを記録したものを GCR から提出し、教員はコメントをして返却する。
- ・ 随時、空いている時間には個人ワーク (PW) を行う。学生はいつでも GCR から質問することができ、教員は必要に応じて GCR のコメント欄や Zoom で対応する。
- ・ 動画視聴ならびに討議、カンファレンスは Zoom を用いて行った。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 対象者

オンライン実習を受講し、研究協力に同意が得られた学生3名

3. データ収集

インタビューガイドを用いた半構成的インタビューをZoomで行った。質問項目はオンラインでの高齢者施設実習で学んだこと、オンラインであったからこそ学びが深まったと感じられること、オンラインでの高齢者施設実習において困難に感じたこと、臨床実習とオンライン実習で違うと感じたこととし、必要に応じて質問を加えた。

4. 分析方法

インタビューの音声から作成した逐語録を熟読し、意味のあるまとまりで内容を切り取り、意味内容が損なわれないよう文を整えコード化した。得られたコードを帰納的に分析しサブカテゴリー化し、さらにカテゴリーを抽出した。分析にあたっては複数の研究者で検討し、妥当性を確保した。

5. 倫理的配慮

参加者には、当該科目の成績が確定した後に研究目的、研究参加の任意性、個人情報保護について口頭及び書面で説明し同意を得た。Zoomを使用したインタビューでは、情報セキュリティの観点から待機室を有効化するなど細心の注意を払った。本研究は所属大学の研究倫理委員会の承認のもと行った（承認番号20E001A）。

尚、本研究において開示すべき利益相反はない。

V. 結果

以下の文中、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〔 〕、コードを〈 〉で示す。

1. オンライン実習の成果（表2-1, 表2-2）

58のコード、11のカテゴリーと23のサブカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリー毎に説明する。

【討議を重ねることによる学びの深化】では、学生はオンライン実習において動画視聴と討議を繰り返す

ため、〈オンライン実習は一日のうちでグループで話し合う機会が多く、いろいろ喋れたので臨地実習より深まったかなと感じる〉ことにつながっていた。〔ディスカッションで考えや学びを整理しながら進めるので記録に悩む時間が少なかった〕と、実習が終了した時点で学びが充分深まっていることがうかがえた。

【学びの過程を共有することによる実習の達成感】では、それぞれ異なる空間にいる学生が、グループで1人の高齢者を受け持って看護を展開していくことで、〈同じ対象者でもそれぞれが考える看護問題が異なり、どれが対象のその人らしさを尊重した看護になるのかを考えられたことは大きかったと思った〉。また、〈リモートでは自分のことだけで必死にならないので、臨地実習よりも話す機会が多かったと思う〉ため、〔同じ対象への看護をメンバー全員で考え討議したことで、その人らしさを尊重した看護の学びを実感できた〕。さらに、〈臨地実習では一人ひとり違う患者を受け持ち、自分の困ったことを話し合っていたが、リモートでは同じ対象者を受け持っているので自分が気付かないところをグループのメンバーで話し合い深めることができた〉。また、〈メンバーと毎日密に連絡していたので、ともに一つのことをやり遂げた達成感が共有でき、リモートの方が仲が深まったと感じる〉ことにより、〔オンライン実習は毎日メンバーと一緒に学習を進めたので、親密度が増し、達成感が大きかった〕と実感した。

【動画視聴と討議を重ねることによる学びの深化と満足感】は、〈臨地実習ではカンファレンスはそれぞれが経験した場面を共有する場になっていたが、リモートではみんな同じ動画を見てそれぞれの気づきを話し合うので、深く話している感じがして楽しいと思った〉や、〔同じ場面をみんなでくり返し視聴して討議を重ねることで多様な視点を得て洞察力が深まったと感じた〕ことから得られていた。

【動画視聴による様々な援助場面の理解と満足感】は、〔動画の中でケアを実践しているスタッフから援助の根拠や意見を聞くことで大きな学びになった〕ことや、〔動画を通して様々な対象への援助場면을学べたことで満足感が得られた〕経験から生じていた。

【看護・介護の専門性の具体的な学び】は、看護職・介護職それぞれの援助場面動画の視聴と討議、看護職のレクチャーと質疑応答を通じて学生は、〔対象者をよく知った上でケアを工夫することが介護職の専門性だと学んだ〕り、〔動画やZoomでの看護師の話から、

施設では緊急時の判断力が看護師に求められていると感じた) ことで得ていた。

【多職種連携における態度の学び】では、看護職・介護職の専門性の具体的な学びを経て、〔施設では介護職の専門性を大切にしたいとの連携が必要だと学んだ〕り、〈患者への対応に関するアドバイスをもらうためにも職場の職員同士のコミュニケーションを活発に取っていかないといけない〕といった〔他職種とのコミュニケーションを活発に取っていかうとすることが大事だと思った〕と学んでいた。

【その人らしさを尊重したケアの重要性への学び】では、学生は、〈施設は生活に密着しているので、その人らしさやその人のペース、価値観を大切にすることが必要と思った〕や、〈動画の中で、介護職が認知

症の人を傷つけない言い方をしていたのがすごいなと思った〕など、〔認知症の人と介護職がかかわる動画から、その人らしさを尊重することが大切と学んだ〕。

【認知症高齢者のとらえ方の肯定的変化】は〈Zoomでのコミュニケーションでは、対象が思っていたよりも話していたり、身なりに気を使っていたりして明るく楽しそうで、本当に認知症なのかと思った〕のように〔Zoomでのコミュニケーションでは認知症の人が明るく楽しそうだったので印象が変わった〕と肯定的にとらえていた。また、認知症高齢者の発言から〔認知症高齢者が目的を持って生活していて、目的意識はとても大切と思った〕という、対象の内面のとらえ方の変化も見られた。

【オンライン実習による主体的な学習態度の涵養】

表2-1 オンライン実習における学修成果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	対象
討議を重ねることによる学びの深化	ディスカッションで考えや学びを整理しながら進めるので記録に悩む時間が少なかった	・カンファレンスで自分の考えを話し、学べたことを実感しながら記録に取り組むので悩む時間が少なくスムーズに進んだ ・ディスカッションで考えや学びを整理しながら進めたので記録に苦勞せず、余裕があったと思う	B B
	オンライン実習は話し合う機会が多く、学びが深まった	・オンライン実習は一日のうちでグループで話し合う機会が多く、いろいろ喋れたので臨地実習より深まったかなと感じる ・オンライン実習では高齢者とのコミュニケーションで気を付ける点をメンバーと話し合ったので、今まで意識していなかったことや教科書に書いてあることを再確認し、コミュニケーションの取り方を学んだ	C C
学びの過程を共有することによる実習の達成感	オンライン実習は毎日メンバーと一緒に学習を進めたので、親密度が増し、達成感が大きかった	・メンバーと毎日密に連絡していたので、ともに一つのことをやり遂げた達成感が共有でき、リモートの方が仲が深まったと感じる ・臨地実習は終わったあと「乗り切った」と感じるが、オンライン実習はメンバーと「やりきったね」という感じが大きい ・臨地実習では一人ひとり違う患者を受け持ち、自分の困ったことを話し合っていたが、リモートでは同じ対象者を受け持っている自分が気付かないところをグループのメンバーで話し合い深めることができた ・オンライン実習ではメンバーで考えて質問できるので、自信をもって聞くことができ勉強になる	B B C B
	同じ対象への看護をメンバー全員で考え討議したことで、その人らしさを尊重した看護の学びを実感できた	・同じ対象者でもそれぞれが考える看護問題が異なり、どれが対象のその人らしさを尊重した看護になるのかを考えられたことは大きかったと思った ・リモートでは自分のことだけで必死にならないので、臨地実習よりも話す機会が多かったと思う ・悩みなどを共有しながら実習を進めた	B B B
動画視聴と討議を重ねることによる学びの深化と満足感	同じ場面を動画で視聴しているので、討議が深まり考えが広がった	・臨地実習のカンファレンスでは、一人ひとりが異なる患者を受け持ち、経験した情景を説明するので正確にとらえづらいが、オンラインではメンバー全員が同じ動画を見ていたので感想が伝わりやすかった ・臨地実習ではカンファレンスはそれぞれが経験した場面を共有する場になっていたが、リモートではみんな同じ動画を見てそれぞれの気づきを話し合うので、深く話している感じがして楽しいと思った ・同じ動画を見てもひとりひとり違う視点からの意見がじっくり聞けたので、考えがすごく広がったと思う	A B A
	同じ場面をみんなでくり返し視聴して討議を重ねることで多様な視点を心得洞察力が深まったと感じた	・何度も同じ動画を見て意見を交わすことで、一回目では気付かなかったことが三回目くらいになるときちんと気づくようになり、どんどん考えが深まっていった感じがした ・動画を見て気付いたことを共有し、ほかの人の意見に注目してもう一度見て高齢者の行動の意味を話し合うことで、考えを深めることができたのは大きく、リモートでできないと感じた ・同じ場面に対する意見がメンバーで全く異なり、そういう気づきもあるのだと聞いて勉強になった	A B B
動画視聴による様々な援助場面の理解と満足感	動画視聴と討議を繰り返すことで、バリデーションを用いた認知症ケアを深く学べた	・プロセスレコードを用いてバリデーションを学んだ際、テクニックを表面的にあてはめていたが、教員の助言をもとに行動の意味を考えて話し合うとその支援に意味があるのだということが深く学べた ・動画を見て話し合っただけで結論に対し、教員からさらに深く考えるよう助言を受けてさらに話し合うことで意見が深まり、認知症の人の行動の背景にある意味と対応の意味を合わせてとらえることができ学びが深まった	B B
	動画の中でケアを実践しているスタッフから援助の根拠や意見を聞くことで大きな学びになった	・動画を見て話し合っただけでわからなかった生活援助の根拠を当事者に質問することができたことは大きかった ・ケアを行ったスタッフの考えや意見からすごく学べるがあった	B B
動画を通して様々な対象への援助場面を学べたことで満足感が得られた	動画の中でしか学べないが、それでも十分と思った	・動画の中でしか学べないが、それでも十分と思った	B
	臨地実習では受け持ち対象のことは見れないが、オンライン実習では動画で様々な対象への援助の場面を見ることができた	・臨地実習では受け持ち対象のことは見れないが、オンライン実習では動画で様々な対象への援助の場面を見ることができた	B

表2-2 オンライン実習における学修成果（つづき）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	対象
看護・介護の専門性の具体的な学び	対象者をよく知った上でケアを工夫することが介護職の専門性だと学んだ	・介護職と看護職は生活援助という点で共通している部分が多いが、介護職は常にその人のことを見てよく知っているから生活援助で工夫する力が長けていると思った ・その人の好みを知っていたり、次にしそうな行動を予測して動いたりしている場面を見て介護職は工夫する力が長けていると感じた	B B
	施設では緊急時の判断力が看護師に求められていると感じた	・緊急時の対応をするのは看護師なので、緊急時の判断力が看護師に求められている専門性だと感じた	B
多職種連携における態度の学び	他職種とのコミュニケーションを活発に取っていくとすることが大事だと思った	・多職種カンファレンス動画から、日常的なコミュニケーションを活発に行える機会を持つことが大事だと思った ・患者への対応に関するアドバイスをもらうためにも職場の職員同士のコミュニケーションを活発に取っていかないとけない	A A
	施設では介護職の専門性を大切にしながらの連携が必要だと学んだ	・施設では病院と違い、入居者のその人らしい健康な生活を維持していくには介護職との連携が必要不可欠であるということをしごく学んだ ・施設では一番身近な存在は介護職であり、高齢者を常に見ている介護職からの情報は大切なので、専門性を大切にしながらかかわりが大事だと感じた	B B
その人らしさを尊重したケアの重要性への学び	動画から生活の場でのその人のペースや価値観を大切にすることが必要と思った	・施設は生活に密着しているので、その人らしさやその人のペース、価値観を大切にすることが必要と思った ・施設の日課を強制するのではなく、その人の生活リズムに合わせて柔軟に対応しているのを見てその人のペースを大切にしていると思った	A A
	認知症の人と介護職がかかわる動画から、その人らしさを尊重することが大切と学んだ	・生活の場でのケアという学びが深かった ・介護職が認知症の人のエピソードに入って世界観を尊重する場面を見て、その人らしさを尊重するということを学んだ ・動画の中で、介護職が認知症の人を傷つけない言い方をしていたのがすごいと思った ・自尊心を傷つけない言葉かけをしている場面から、高齢者の背景を踏まえて個別性に合わせるがかかわることが大切だと思った	A A C C
認知症高齢者のとらえ方の肯定的変化	Zoomでのコミュニケーションでは認知症の人が明るく楽しそうだったので印象が変わった	・Zoomで高齢者と一回だけかかわったことが印象に残っている ・Zoomでのコミュニケーションでは、対象が思っていたよりも話していたり、身なりに気を使っていたりして明るく楽しそうで、本当に認知症なのかと思った ・コミュニケーションをとることで認知症の人は何もできないと思っていた印象が変わった	C C C
	認知症高齢者が目的を持って生活していて、目的意識はとて大切と思った	・（認知症を持つ）受け持ち高齢者が目的をもって生活しているのを学び、目的があるという意識はとて大切だと思った	A
オンライン実習による主体的な学習態度の涵養	オンライン実習は気持ちに余裕があるので、実習時間外でもメンバーに相談したり、話し合ったりして学びを深めた	・グループ通話でコミュニケーションをとっていた ・実習終了後も電話などで話し合いながらまとめを作った ・実習終了後も話し合い、一日中実習しているみたいな感じだった ・オンライン実習は気持ちに余裕があるので、実習が終わってからもメンバーと話し合いながら考えることができ、臨地実習の帰校日だけで作るよりもよく考えて作れた気がする ・臨地実習では自分のうけもち対象だけで精一杯なので、カンファレンス以外でメンバーに相談はしない	C B B B
	オンライン実習では教科書や文献で自分で調べて学びを深めた	・オンライン実習では自分で調べたりレクチャーを受けたりして施設では医師が常駐していないことから看護師や介護職の役割が大きいと学んだ ・臨地実習では文献を見たのはレポートを書くときぐらいだったが、オンライン実習中は教科書や文献を見た	A C
	オンライン実習は実習時間外も自己学習に積極的に取り組んだ	・記録用紙の記入を実習時間内に進めることができたので、実習終了後の自己学習の時間が多く取れた ・実習の移動時間がないので終了後に多く勉強できた	A A
	オンライン実習では自分の考えを言う機会が多いので、言語化する力が身についた	・グループで自分の考えをいう機会が多くて少し大変だと思った ・意見を言わなければいけない負担感があった ・話さなければいけないので、自分の考えや意見をしっかり持たなければと思ひ、自分の考えを出す力が身についたと思った ・意見を言わなければならぬので自己学習しようとおもった	C C C C
教員との円滑なコミュニケーションによる学びの深化	リモート実習は教員に質問したり助言をもらいやすいので、考えが深まった	・オンライン実習ではケアの時間や教員の都合に縛られずにメール等ですぐに質問できてしっかり考えることができた ・記録に関する疑問は教員とのやりとりで解決できた ・報告会の準備では一つ一つの語の意味も含めて教員のアドバイスをもらいながら時間をかけて話し合い、病院と施設の看護師の役割と機能の違いを深く学べた	B B B
	実習指導者との緊張関係の緩和	・臨地実習では実習指導者との関係性も気を付けながら実習をやっているが、リモートではそのストレスはあまりなかったと思う	A

では、〈臨地実習では自分のうけもち対象だけで精一杯なので、カンファレンス以外でメンバーに相談はしない〉学生も、オンライン実習では〈グループ通話でコミュニケーションをとっていた〉。また、〔オンライン実習は気持ちに余裕があるので、実習時間外でもメンバーに相談したり、話し合ったりして学びを深めた〕。さらに、学生は臨地実習ではレポートを書く時くらい

しか文献を見なかったが、〔オンライン実習では教科書や文献で自分で調べて学びを深めた〕行動をとっていた。また、〈実習の移動時間がないので終了後に多く勉強できた〉ことで〔オンライン実習は実習時間外も自己学習に積極的に取り組んだ〕のように通学に時間を費やさずに済むことによる余裕が自己学習の動機となっていた。さらには、〔オンライン実習では自分

の考えを言う機会が多いので、言語化する力が身についた」と感じていた。

【教員との円滑なコミュニケーションによる学びの深化】では、いつでも教員にメールを通じて連絡が取れることから、〈オンライン実習ではケアの時間や教員の都合に縛られずにメール等ですぐに質問できてしっかり考えることができた〉のように学生は「リモート実習は教員に質問したり助言をもらいやすいので、考えが深まった」と感じていた。

【実習指導者との緊張の関係の緩和】では、〈臨地実習では実習指導者との関係性も気を付けながら実習をやっているが、リモートではそのストレスはあまりなかったと思う〉と、学生は「オンライン実習では実習指導者との関係性のストレスはなかった」と感じていた。

2. オンライン実習における課題(表3)

オンライン実習における課題は17のコードが得られ、4つのカテゴリーと6のサブカテゴリーが抽出された。

【看護技術の実践力への不安】は、〈看護技術という点では、臨床実習では対象の反応から自分の行動を修正できるが、オンライン実習では自分の行動の評価がしづらかったと思った〉や、〈動画やレクチャーで学

んだ不安を感じさせないバイタルサインの測定方法を自分も実践してみたかった〉というように「オンライン実習では実践の機会が乏しく、看護技術が深められなかった」と感じていた。さらには「ちゃんとコミュニケーションをとれるのかとかちゃんと働けるのかという不安が大きく、臨地実習に行きたかったと思う」といった「看護技術やコミュニケーションという点で臨床に出てからの不安」を訴えていた。

【オンライン実習で得られる情報量の限界】では、〈臨地実習であれば、対象者とかかわる中で得られた情報が、紙面上でしか得られずわかりにくかった〉のように「動画や紙面では得られる情報に限界があると感じた」り、「対象者を深く知るには、コミュニケーションが1回では不十分だった」と感じていた。

【資料作成におけるグループワークのしづらさ】では、学生各々が自宅で受講しているため、〈グループでまとめを作成する際、リモートでは見てほしい部分を伝えるのにもいちいち説明せねばならなくて大変だった〉というように「オンラインでのグループワークではメンバー同士のコミュニケーションがとりにくく、資料作成が捗らなかった」と感じていた。

【オンライン実習での臨地実習と異なる疲労感】では、「長時間パソコンに向うことによる臨地実習と違う疲労感」を持っていた。

表3 オンライン実習における課題

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	対象
看護技術の実践力への不安	オンライン実習では実践の機会が乏しく、看護技術が深められなかった	看護技術という点では、臨床実習では対象の反応から自分の行動を修正できるが、オンライン実習では自分の行動の評価がしづらかったと思った	A
	看護技術やコミュニケーションという点で臨床に出てからの不安がある	動画やレクチャーで学んだ不安を感じさせないバイタルサインの測定方法を自分も実践してみたかった	A
		リモートでは看護技術を深められなかったことが心配である	A
オンライン実習で得られる情報量の限界	動画や紙面では得られる情報に限界があると感じた	ちゃんとコミュニケーションをとれるのかとかちゃんと働けるのかという不安が大きく、臨地実習に行きたかったと思う	C
		コロナ禍で人とかかわることが少なく、いろんな人とコミュニケーションがとれるのが不安	C
		動画ではそこに映っている場面しか学べないことが限界と感じた	B
		施設オリエンテーションの動画では、その先の建物の造りがどうなっているか気になったが、そこ止まりという印象だった	B
資料作成におけるグループワークのしづらさ	オンラインでのグループワークではメンバー同士のコミュニケーションがとりにくく、資料作成が捗らなかった	臨地実習であれば、対象者とかかわる中で得られた情報が、紙面上でしかえられずわかりにくかった	C
		対象者の生活パターンをもっとしりたかった	C
		対象者とのコミュニケーションでは、時間が短い上に一回だけだったので、その人のことを知るには不十分だったという気がする	B
オンライン実習での臨地実習と異なる疲労感	長時間パソコンに向うことによる臨地実習と異なる疲労感	コミュニケーションの機会が複数あった方が、その人の深い部分を知ることができたと思う	B
		遠隔ではまとめの資料をグループで作成しづらかった	A
		資料作成の役割が明確になっていなくてやりづらかった	A
		オンライン実習中のカンファレンスでは役割が決まっていたが、資料をまとめるときは役割を決めていなかった(のでやりづらかった)	A
		グループでまとめを作成する際、リモートでは見てほしい部分を伝えるのにもいちいち説明せねばならなくて大変だった	C
		一日部屋にこもってパソコンを見ていたので臨地実習と違う疲れたと感じた	C
		昼休みに体を動かしたり、外に出て気分転換した	C

VI. 考察

オンライン実習の成果をもたらした要因として、援助場面を俯瞰することによる気づきの促進、討議と自己学習の反復による主体的学習態度の涵養、実在の対象と関わった体験からの学びの3つの視点で考察し、今後の課題について考える。

1. 援助場面を俯瞰することによる気づきの促進

臨地実習では学生が援助を行う当事者として、看護を実践しながら対象の反応や自らの行動を振り返ることが学びにつながる。体験からの学びの効果は大きいですが、ケアの当事者となる学生は自身の行動を客観視することが難しい。さらに山下らが述べているように知識、技術が不十分なまま臨地に出ることで、学習成果や看護過程の記述に時間がかかり自己学習時間がとれなくなる³⁾。一方、オンライン実習では学生は援助場面の動画を第三者の視点で客観的に何度も見ることができる。山口は動画の教育的機能として、繰り返し視聴して理解を促進できること、目標とする情報以外にも様々な情報が含まれている情報の余剰性が学習者に色々な見方や考え方を誘発する可能性を与えること、多人数が同時に視聴して共通の認識を持つことができ、集団学修や集団討議を効果的に行う手がかりを提供できることを挙げている⁴⁾。今回のオンライン実習においては、「同じ場面を動画で視聴しているので、討議が深まり考えが広がった」という学びの広がりや「同じ場面をみんなでくり返し視聴して討議を重ねることで多様な視点を得て洞察力が深まったと感じた」という学びの深まりをもたらしていた。これは、動画の教育的機能に加えて、自宅という緊張が強いられない状態で援助場面の動画を繰り返し視聴した上で討議し、援助の意図や効果を学生が熟考することで、学生の気づきを促進することにつながったと考える。さらには、動画の中で援助をしている介護職員に質問する機会を得たことで、気づきが的を射ているのか否か確認でき、「動画の中でケアを実践しているスタッフから援助の根拠や意見を聞くことで大きな学びになった」と考える。

2. 討議と自己学習の反復による主体的学習態度の涵養

オンライン実習では学生各々が動画視聴から気づき、学んだことを討議で共有した。討議ではZoomの画面共有機能を用いて全員で動画を視聴した後、教員

が学生の発言を促していった。先述の通り学生は同じ場面を視聴しているため、何を見てどう感じたかの共有が容易にでき、他者の意見から多様な視点と新たな気づきを得ていた。学生は臨地実習では他の学生に相談したくても状況説明から始めざるを得ないことから、「自分のうけもち対象だけで精一杯なので、カンファレンス以外でメンバーに相談はしない」状況にある。早瀬らはオンライン実習の学習効果として、ひとつの事例をみんなで展開することで足りない視点に気づきやすいと報告している⁵⁾。本研究においても、すでに場面の共有がされていることから意見が伝わりやすく、討議による学びの効果を学生は実感しやすい状況にあったと考えられ、実習プログラム外にグループ通話などで相談や話し合いを持つ主体性を発揮することにつながったと考える。さらに討議で発言する機会が多いことから、学習不足を感じた学生の自己学習の動機付けになり、主体的学習態度を涵養することにつながったと考える。

3. 実在の対象と関わった体験からの学び

オンライン実習では実習施設の協力により認知症を持つ入所者の情報を得て看護過程を展開し、生活史を把握して高齢者像を深めた上でZoomを通じてコミュニケーションを行った。1回のみ15分程度の実践であったが、学生に【認知症高齢者のとらえ方の肯定的変化】をもたらした。桂らは、看護学生が抱く認知症高齢者のイメージは学年の進行に伴って変化し、「尊厳性」や「親密性」に対する肯定感が高まると述べている⁶⁾。今回のオンライン実習ではコミュニケーションの実践の前に、対象者に思いをはせながらその人らしさをとらえ、アセスメントした経緯があった。この経緯があったからこそ、15分という短い時間のコミュニケーションでも、認知症高齢者のイメージの肯定的変化が得られたと考える。その経緯の中でMilton Mayeroffの述べているケアの要素である「専心」⁷⁾が生じたと考える。模擬事例ではない生活者として実在する対象にコミュニケーションを実践する方法を熟考し、工夫をする過程で対象に専心し、ケアとしてのコミュニケーションを体験したことによって深い学びとなったと考える。

4. オンライン実習における課題

オンライン実習では対象者に触れたり、直接関わったりする援助ができない。このことは学生の【看護技

術の実践力への不安】となり、就職後の不安にもつながっていた。学生と対象者が異なる空間にいる以上、この壁を越えることは難しい。しかし、臨地実習では学生は日々の援助に追われ、実践はできても思考がついて行かない状況に陥る恐れがある。行動しながら考えることを求められる看護においては、基礎教育の段階で思考力を磨くことは重要であり、オンライン実習で培った思考力は臨床の場でも発揮できるものであると考える。

Ⅶ. 結論

動画視聴と討議の反復、実在の対象の看護過程を展開し、遠隔で受け持ち高齢者とコミュニケーションを図ることを中心としたオンライン実習は、学生の気づきの促進と学習への主体性の涵養を通じて思考力を磨くことにつながるということが示唆された。一方で実践力への不安という課題を残した。オンライン実習の持つ学生の思考力を磨くという特性を生かし、臨地実習や学内実習と組み合わせることでより効果的な実習プログラムに発展させることができる可能性があると言える。

Ⅷ. おわりに

本研究は、感染症蔓延下における緊急的な代替実習という限定された状況で、対象者も3名と少なく、現状報告にとどまるという限界がある。Covid-19という危機を看護学実習の学習効果を高める工夫ができる好機ととらえ、その成果と課題について研究を重ねていく必要がある。

最後に、オンライン実習を行うにあたりご協力いただいた受け持ち高齢者の皆様ならびに実習施設職員の皆様、研究にご参加いただいた学生の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

- 1) zoom 社ホームページ
<https://explore.zoom.us/ja/products/meetings/>
(2022年9月24日閲覧)
- 2) Classroom の概要
https://support.google.com/edu/classroom/answer/6020279?hl=ja&ref_topic=10298088 (2022年9月24日閲覧)
- 3) 山下暢子, 舟島なをみ, 中山登志子: 看護学実習中の学生が直面する問題—学生の能動的学修の支援に向けて—, 看護教育学研究, 27 (1), 51-65, 2018.
- 4) 山口榮一: 視聴覚メディアと教育 初版, 104-105, 玉川大学出版部, 2004.
- 5) 早瀬麻子, 木下純子, 田尻后子: オンラインでの母性看護学実習における学習効果, 佛教大学保健医療技術学部論集, 15, 29-44, 2021.
- 6) 桂晶子, 佐藤このみ: 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ, 宮城大学看護学部紀要, 11 (1), 49-56, 2008.
- 7) Milton Mayeroff: On caring, 1971, 田村真, 向野宣之, ケアの本質; 生きることの意味 初版, ゆみる出版, 193, 1987.